タイトル：『汐製菓会社の新作 64　マフィン 4』

登場人物

汐（30 代）

汐製菓会社の社長。奇抜なアイデアでお菓子業界に風を吹かせようとしている。「面白きことも無き世を面白く」が座右の銘で、毎回風変わりな商品を考案するが、社員や取引先を巻き込んで振り回す。

塩田（30 代）

汐の秘書。真面目で心配性な性格。社長の常軌を逸した発想に悩まされつつも、その情熱にどこか惹かれている。実は大のお菓子好きで、密かに試作のお菓子を楽しんでいるが、今回のマフィンにはさすがに戸惑いを隠せない。

国内外の顧客・バイヤー

商品開発に巻き込まれる様々な顧客。国内外のバイヤーやSNSのインフルエンサーたちが巻き込まれ、マフィンの斬新すぎる味に困惑していく。

あらすじ

奇抜なアイデアで常に新しい商品を発案してきた汐製菓会社。今回は、社長の汐が「海老天味のマフィン」を新作として提案。秘書の塩田は当然ながら反対するが、汐の勢いは止まらない。試作を重ね、国内外の顧客に試食を依頼するが、世界の反応は……。

シーン1：オフィスでの発案（拡張版）

（オフィスにて。汐は机に足をかけながら、ニヤニヤと奇妙な笑みを浮かべている。塩田は資料を整理しつつ、彼の挙動に気づく。）

汐

「塩田！今日は素晴らしい一日だぞ。ついに……次の一手が決まった！」

塩田（無感情に）

「次の一手、ですか。今度は何ですか？まさか、また“世界を変えるお菓子”とか言うつもりじゃないですよね？」

汐（大きく頷きながら）

「その通りだ！今回のテーマは『和と洋の真の融合』だ！」

塩田（警戒しながら）

「……嫌な予感しかしませんけど、具体的にはどんな『融合』なんですか？」

汐（急に興奮して）

「マフィンだ！それも、ただのマフィンじゃない！**海老天味のマフィン**だ！」

塩田（一瞬、言葉を失う）

「え、えび……？えび天……をマフィンに入れるんですか？それって、普通はおかしいと思いますけど。」

汐

「そこが面白いんだよ、塩田！普通じゃないからこそ、人々の心を掴むんだ！」

塩田（深いため息をつきながら）

「でも、どう考えても、それはまずいと思います。社長、今度こそ破滅への道ですよ。」

汐（大笑いしながら）

「破滅？いやいや、違うんだよ、塩田。これは未来だ！海老天のサクサク感とマフィンのふわふわ感、その組み合わせが**次世代のお菓子**になるんだ！」

塩田（ぼそっと）

「……なんでこんな会社に就職したんだっけ。」

（汐は気にせず、自信満々に試作室へ向かう。）

シーン2：試作室での奮闘（拡張版）

（試作室で、汐がエプロンをつけながらテンション高くマフィンの生地を作っている。塩田は心配そうに見守る。）

汐

「さあ、塩田、これは革命の瞬間だぞ！今日は**和と洋**が一つになる記念日だ！」

塩田

「私的には、これが終わったら早退していいですか？」

汐（完全に無視して）

「よし、まずは海老天を用意だ！油でカラッと揚げて、次にマフィンの生地を……っと！」

（海老天を生地に豪快に入れ、オーブンにセットする。）

汐

「この香り！このサクサク感！これがマフィンの新しい時代を作る！」

塩田（嫌な予感を抱えながら）

「海老天の匂いが強すぎて、甘いマフィンの香りが消えてますけど……」

（オーブンの中でマフィンが焼き上がるが、妙な音を立てている。）

汐（全く気にせず）

「この音！サクサク感が倍増してる証拠だ！」

塩田（戸惑いながら）

「……音が聞こえるマフィンなんて初めてですけど、これ本当に大丈夫ですか？」

（オーブンを開けると、異様な形をしたマフィンが登場。汐は満足げに手に取る。）

汐

「見ろ！これが新時代のマフィンだ！未来の食卓はこれで溢れるんだ！」

塩田

「……未来の食卓にこんなのがあったら、私は確実に絶食しますけどね。」

シーン3：国内外のお客様の反応 ー 試食会（拡張版）

（社内で試食会が開かれ、社員やインフルエンサーたち、国内外のバイヤーが参加。皆、恐る恐るマフィンを手に取る。）

社員A

「これ、本当に食べていいんですか……？何かの罰ゲームとかじゃないですよね？」

社員B

「……一口で病院送りとか、そういうのはないですか？」

汐（自信満々に）

「大丈夫だ！これは未来の味だ！さあ、存分に味わってくれ！」

（全員、恐る恐る一口かじる。しばらくの沈黙。）

社員A

「……すごい味がしますね。今まで一度も食べたことがない味です……。」

社員B（顔をしかめて）

「なんか、揚げた海老が甘くて……でも苦いような……？」

インフルエンサー

「インパクトはすごいですね。これ、動画にしたら絶対バズりそう……」

（その後、海外バイヤーが登場。彼らもマフィンを試食。）

外国人バイヤー1（日本語表記）

「コンニチハ！新商品デスカ？トテモ楽しミデス！」

汐

「そうだ！日本と西洋が一つになった新しいお菓子だ！存分に楽しんでくれ！」

外国人バイヤー1（一口食べて、微妙な顔）

「トテモユニークナ味デスネ……エビ天……甘イ……コノ味ハ……少シ慣レガ必要デスネ。」

外国人バイヤー2

「ウチノ国デハ、コノ味ハ少シ難シイカモ……？」

汐

「いやいや、大丈夫だ！最初は驚くけど、何度も食べればクセになる！試しに10万個ほど注文してくれ！」

（塩田は頭を抱えながら、困惑するバイヤーたちの顔を見ている。）

塩田

「……これ、無理です。確実に無理です。」

シーン4：汐の過去のエピソード（追加シーン）

（汐がなぜ奇抜なアイデアにこだわるのかを描くシーン。塩田が彼の過去について語る。）

塩田

「社長、そういえばなんでそんなに突飛なアイデアばかり出すんですか？」

汐（ふと真面目な顔になり）

「それはな……昔、俺が子供の頃、いつも普通のお菓子ばかりだったんだ。あの頃の俺には、**驚き**がなかったんだよ。」

塩田

「驚き？」

汐

「ああ。人生は面白いことが少ない。だから俺は、みんなに驚きを与えるために、この会社を作ったんだ。」

塩田（理解できない様子で）

「それで……海老天マフィンなんですか……？」

汐（誇らしげに）

「そうだ！驚きと感動は紙一重だ！」

シーン5：結末と次なる挑戦（拡張版）

（最後に、海老天マフィンは失敗に終わるが、汐はまったく気にしていない。塩田が次のアイデアを聞く。）

汐

「さあ、次はどうするかな！まだまだ可能性は無限大だぞ！」

塩田

「……え、まだやるんですか？次は何ですか？」

汐

「そうだな、次は**抹茶味のホットドッグ**とかどうだ？」

塩田（呆れて）

「お願いですから、普通の味にしてもらえませんか……」

（エンディング。汐と塩田の姿が遠ざかり、フェードアウト。）